令和８年６月２２日発行

草津未来研究所 News Letter

令和７年度に実施した調査研究の報告会を開催しました

草津未来研究所は、市民・社会ニーズの充足や課題の解決に向けた政策形成に寄与することを目的として、草津市の未来について、中長期的・広域的かつ部局横断的な視点で政策研究を行っています。令和7年度は2つのテーマについて調査研究を行い、6月1日に報告会を開催しました。当日は、市職員など、計22名の方に参加いただきました。

調査研究①「健幸創造都市草津の実現に向けたスマートシティの推進に関する調査研究」

日本においては地域が目指すべき地域ビジョンのモデルの一つとしてスマートシティが位置づけられており、全国各地で取組が進んでいます。本市においてスマートシティにどのように取り組んでいくべきなのか、世界や全国の事例から『スマートシティとはなにか』を整理し、今後の取組方について考察しました。

本市における各計画においてスマートシティに関しての記述があるかを確認すると、「スマートシティを推進する」と明言することはしておりませんが、基本構想には Society5.0 の記載があり、Society5.0 の実装の場であるスマートシティの取組も含まれる形となっており、初動段階に当たると考えます。

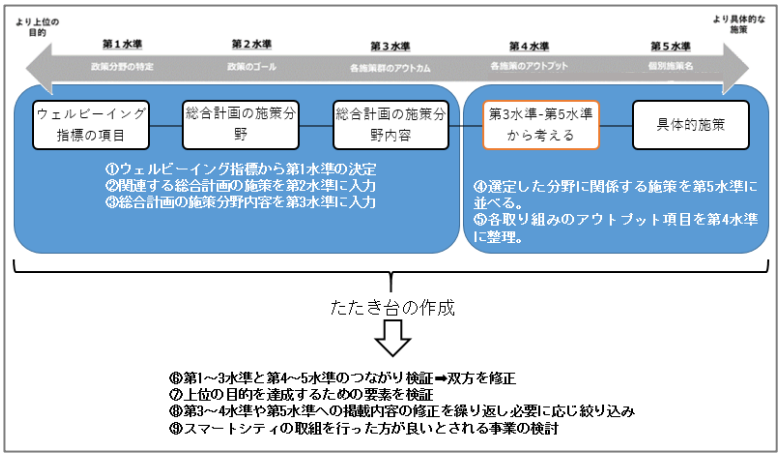

図１　提言⑤スマートシティの取組手順（草津市版）

今後より一層スマートシティを推進していくために、1点目スマートシティの取組を位置づける、2点目共通ビジョンを設定する、3点目スマートシティ推進担当を設置する、4点目スマートシティへの取組方、5点目スマートシティの取組手順（図１）の5つの提言を行いました。

スマートシティの取組は最初の土台作りを怠ると目的がはっきりしない取組になりかねず、単なる技術導入になりスマートシティが重要としている“持続可能性”の視点が欠如する恐れがあることから、スマートシティに取り組む土台をしっかり作り、一歩一歩着実に進んでいくことをまとめとしました。

本調査では、スマートシティの推進に伴うリスク面について十分な検討ができていないことから、今後推進していく上で、さらなる調査・研究は必要であると考えます。

調査研究②「草津市における買物弱者の実態に関する調査研究」

本市は現在も人口が増加し、高齢化率は全国と比較しても低水準であるが、今後高齢者の増加や高齢化率の上昇に伴い、日常の買い物に支障をきたす高齢者が増加することが懸念されます。

本調査研究では、本市における買物弱者の実態を把握するため、本市の買い物を取り巻く現在の状況を整理したうえで、65歳以上の要介護1～5の認定を受けていない市民2．000人を対象に、アンケート調査を実施し日常生活圏域ごとに地域特性をみてみました。

調査に用いた指標は、買い物自立度や買物しやすいなど5つの因子における食料品アクセス度を包括的に評価する指標（表1、図2）、主観的幸福感を測定する改訂版 PCGモラール・スケール、フレイル度を測定するイレブンチェックの3つの指標です。これらの結果からうかがえる特性を、中学校区単位である日常生活圏域ごとにまとめました。

表１　地域高齢者のための包括的食料品アクセス尺度

因子1　買い物自立度　　*反転項目	
1	体の問題で、買い物に行くのに苦労する*
2	体の問題で、買った品を持ち帰るのに苦労する*
3	道路の問題（坂道、階段、狭さなど）で、買い物に行くのに苦労する*
4	お会計に手間取ったり、焦ったりする*
5	カートや杖をもって、店内を移動するのに苦労する*
6	自分が行きたい時に、買い物に行くことができない*
因子2　買物しやすい環境	
1	私の住んでいる地域では、スーパーが充実している
2	私の住んでいる地域では、食料品を買うのに色々な店を使い分けられる
3	よく食料品を買いに行く店は家から歩いていける場所にある
4	よく食料品を買いに行く店は、必要な食料品がすべてそろう
5	よく食料品を買いに行く店は、何かのついでに行くことができる場所にある
因子3　食料品入手の社会的動機	
1	買い物に行った時に、知り合いと会って会話することがある
2	買い物は日常の楽しみの一つである
3	近所の人と料理をおすそわけしたり、買ったものを分けあったりする
4	近所の人や友人と一緒に買い物に行く
5	よく行くお店の店員は親切だと感じる
6	食事は日常の楽しみの一つである
因子4　食生活面のサポート	
1	体調の悪い時に、代わりに買い物を頼める人がいる
2	買い物に行きたい時に、送り迎えしてもらえる人がいる
3	1日1回は、誰かと一緒に食事をする
因子5　食生活の経済的余裕　　*反転項目	
1	家計が苦しいため、欲しい食料品を購入できない*
2	食事にはなるべくお金をかけたくない*
3	少しでも安い店や割引がある店を優先して利用する*

直近1週間について、4件法(とても／ややあてはまる、あまり／まったくあてはまらない)で回答

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
高穂	18.1%	44.2%	40.7%	19.0%	35.0%
草津	16.4%	19.6%	40.4%	21.8%	33.1%
老上	10.6%	28.0%	33.3%	13.6%	34.1%
玉川	15.0%	42.9%	45.0%	17.9%	34.3%
松原	15.1%	43.4%	30.2%	15.1%	32.1%
新堂	11.3%	47.5%	35.6%	12.5%	31.9%
全体	15.0%	36.5%	38.4%	17.5%	33.6%

図２　各因子における基準点以下の割合

日常生活圏域ごとに特徴があり、買物しやすい環境は良好であるが、主観的幸福感が低い地域、包括的食料品アクセスは他地域と比較して良好とはいえないが、主観的幸福感が高い地域、主観的幸福感は低く、フレイル度が高い地域、また、立地的に、よく利用する食料品店までの移動手段が徒歩が多かったり、自動車・バイクの割合が多かったりと、日常生活圏ごとの傾向などがわかりました。

今回のアンケート結果については、因果関係を調査していないことから、今後、大学との共同研究により、詳細な分析を行う予定です。

詳しい内容は草津未来研究所のホームページに掲載している調査研究報告書をご覧ください。

草津未来研究所　TEL:077-561-6009